

研究報告書

学校名 沖縄県立八重山特別支援学校

1 研究主題

「私たちからはじまる住み続けられるまちづくり」
～学部・教科を超えて取り組む持続可能な地域づくり～

2 主題設定の理由

(1) 経緯

本校では令和5年度より、コンポストを学校敷地内に設置し、高等部生徒を中心に給食の残食（1日平均2Kg）を処理する取組を行っている。本来は可燃ごみとして処理していた残食を資源循環へ転換することで、SDGs目標12「つくる責任 つかう責任」の実践につなげることを目的として、この活動を行っている。

本実践を令和6年度に「SDGs QUEST みらい甲子園沖縄県大会（主催：SDGs QUEST みらい甲子園沖縄県大会実行委員会）」に出展したところ、一次審査を通過しファイナリストに選出された。発表準備を通して、生徒のSDGs達成に対する主体的な姿勢の高まりが見られた。

(2) 主題設定に向けて

給食残食コンポストの実践を通して、SDGsの視点は教科横断・学部横断的な教育活動へと発展する可能性があることが分かった。今年度は研究指定校として、コンポスト活動にとどまらず、SDGsの観点から学校全体の教育活動を再構築することを目指すことにした。

石垣市はSDGs未来都市（内閣府地方創生推進事務局選定）として積極的な取組を推進している。本校においてもSDGsを学び実践することで、石垣・八重山地域の価値を再認識し、「住み続けられるまちづくり」に貢献できる人材の育成を図る。また、生徒の主体的活動を通して自己効力感を高め、持続可能な社会の担い手としての資質・能力の育成を目指したい。

3 研究実践の主な内容

(1) 研究方針

あらゆる学部・教科の授業や特別活動、総合的な探究（学習）の時間をSDGsに関連付け、年間の研修スケジュールを計画する。特に高等部社会科を中心に、教科横断的な実践を推進した。

(2) 主な活動内容

SDGsを軸に本校の教育活動について分類した（図1）。各教科での学習のみならず、寄宿舎や図書館での取り組みなどもSDGsに関連することが分かる。また、この図から本校では特にSDGs目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」やSDGs目標11「住み続けられるまちづくりを」に関する教育活動が目立

つことが分かる。本校の SDGs 実践事例についてまとめていきたい。

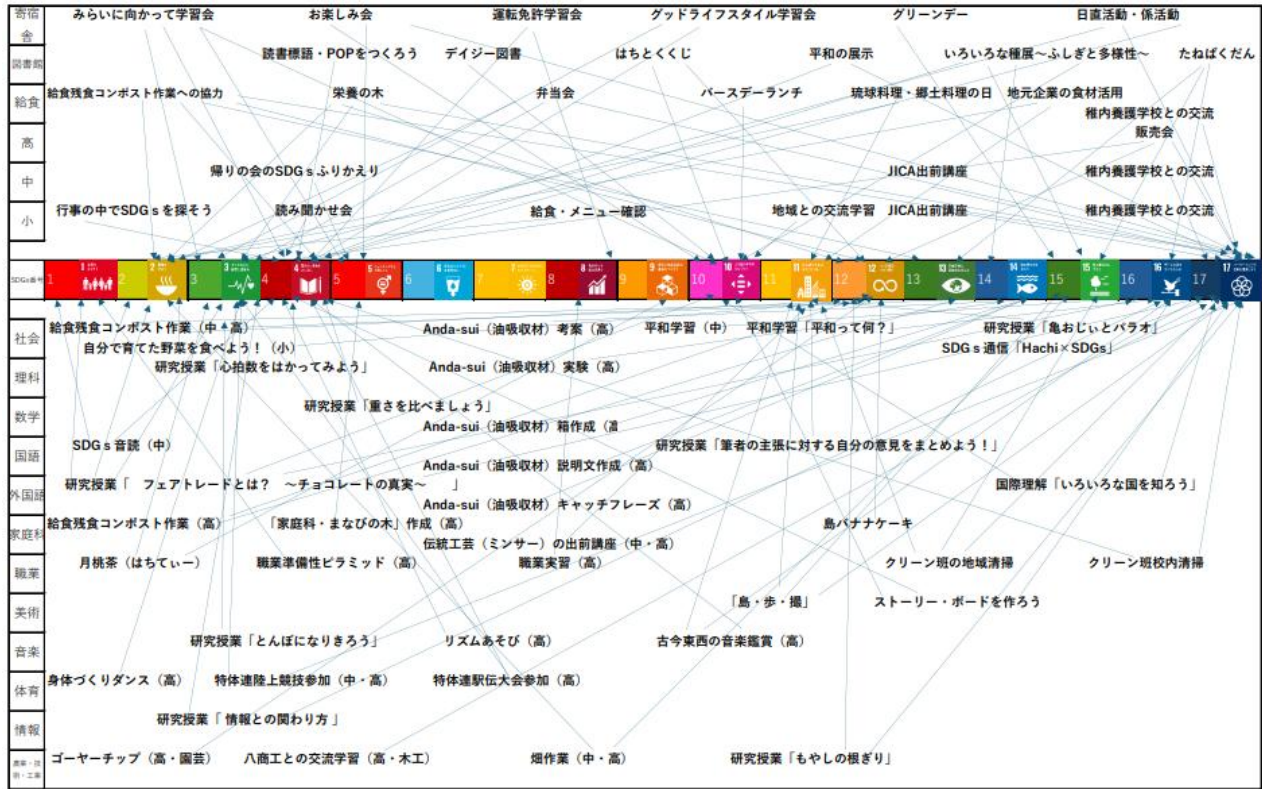


図1 八重山特別支援学校・SDGs 関連図

(3) 研究実践例

① 給食残食コンポスト作業 (高等部社会、数学科、家庭科、職業及び中学部社会など)



図2 野菜くずと残食の量を図る



図3 コンポストに投入する

これは令和5年度より実施している取組である。令和6年度は研究指定校予算によりコンポスト4台を増設した上で発酵促進基材等を購入し、「野菜くず用」「残食用」に分けて処理過程を観察した。



図4 「栄養の木」毎日の

給食メニューの残量で実を色分けしている。



図5 生徒考案ロゴ



図6 PTA 総会での試飲会



図7 月桃茶販売

教科横断的な学習の面として、家庭科の学習で栄養教諭作成の「栄養の木 (図4)」と関連付け、残食量と栄養の関係を考察した。数学科が「重さと単位」の学習として計量活動を導入した。高等部生徒が中学部生徒へ計量方法を教える場面も見られ、学部間連携が生まれた。

② 月桃茶 (Team はちティー) プロジェクト (高等部・職業)

高等部 2 年職業科において、担当教諭の指導の下、校内の月桃を活用した商品開発を企画した。PTA 総会で試飲会とアンケートを実施し、ロゴ制作や販売計画のプレゼンテーションも行った。

校内販売会ではこれらが完売し、地域販売にも展開した。この実践をもとに、SDGs QUEST みらい甲子園 2025 にエントリーし、県内高校チームの中からファイナリストに選出された。

③ 「Anda-sui」開発プロジェクト（高等部全教科）



図 8 油吸収材の実験（理科）



図 9 包装紙の工夫（数学科）



図 10 ネーミング製作（国語科）

12 月の高等部・校内販売会に向けて、「油吸収材」の製作を行った。

社会科で企画・立案や SDGs のゴールとの関連を考え、理科でどの素材が最も油を吸うのかを実験し、数学科で入れ物の折り方を工夫した。国語科でネーミング「Anda(油)-sui(吸い)」の検討や説明事項の記載を考え、英語科では外国人でも分かるキャッチフレーズを考え、入れ物に貼るシールを作成した。自立活動の時間で手指の巧緻性訓練のために素材となる新聞紙を裂く作業やシュレッダー作業を行うなど全員で商品製作を行った。

④ 帰りの会でのふりかえり（中学部・特別活動）



図 11 帰りの会に「今日の SDGs」発表



図 12 発表した内容を表にする



図 13 SDGs の学び（社会科）

中学部では社会科での SDGs に関する継続的な学習をもとにして、各学級で毎日の帰りの会において SDGs ゴールの達成に向けたふりかえりを行っている。「歯磨きの時に、水の出っぱなしをしませんでした。これは『SDGs 6 安全な水とトイレを世界中に』に関連します。」とのコメントを生徒が行った。

⑤ 食品ロスをなくそう（中学部・家庭科、小学部）



図 13 小学部と一緒に完熟マフィンづくり

小・中の合同授業として、家庭科では食品ロスの問題を取り上げ、「完熟パインでつくったばいナップるまふいん」の実践を行った。地域のパイン農家から提供を受けた廃棄予定の果実を活用し、食材を無駄なく使い切るレシピを試行錯誤しながら検討することで、持続可能な消費行動について学習した。本実践は、SDGs

目標 12「つくる責任 つかう責任」と関連付けられる取組である。

また、本活動は小学部との合同授業として実施し、学部間の協働を通して学びを深めた点において、SDGs 目標 17「パートナーシップで目標を達成しよう」にも関連する実践である。本取組は、令和 7 年度食品ロス削減アイデア募集キャンペーンにおいて継続実施賞を受賞し、価値のある実践として評価された。

中学部の実践の特徴は、特定の単元を新設するのではなく、既存の授業内容に SDGs の視点を関連付けることを意識した点にある。日常的な学習活動の中に SDGs の観点を位置付けることで、継続可能な実践モデルを構築することができた。

⑥自分で育てた野菜を食べる（小学部・生活科）



図 14 野菜作りの様子



図 15 料理

小学部では「SDGs について知る」ことを目標に、生活科の学習を中心に実践が行われた。

小3の生活科では、校内の畑で野菜を育て、それを試食するまでの活動が行われた。これは食べ物がどの

ように作られるかを学び、SDGs 目標 2「飢餓をゼロに」を達成することに繋がる上に、食べ物を大切に食べることから SDGs 目標 12「つくる責任、つかう責任」に関連する。この実践をきっかけに、偏食があった児童が進んで自分たちが育てた野菜で作った料理を食べる姿が見られるなど、子どもたちの姿に変容が見られた。

⑦生徒がつくる SDGs 通信「Hachi×SDGs」（高等部・社会科）



図 16 SDGs 通信第 3 号

高等部社会科の授業で、学校内の SDGs について調べ、その取組を校内外に発信することを目的として SDGs 通信を生徒と教師で作成した。授業の中で文章や関連する SDGs について考え、全部で第 3 号まで製作し、ホームページで公開している。

この通信製作を行うことで、校内外に本校の取組を広げるだけでなく、生徒は SDGs について詳しく調べることができ、校内の取組について俯瞰的かつ多角的に見る力がついた。

⑧ SDGs 先進地域視察（徳島県）



図 17 ゼロ・ウェイストセンター（上勝町）



図 18 徳島県立阿南支援学校にて



図 19 阿南支援学校の取組

令和7年11月、SDGs先進地域である徳島県にて視察を実施した。上勝町役場およびゼロ・ウェイストセンターでは、本校のSDGs実践の発展に資する取組について、話を伺った。

上勝町は日本で初めてゼロ・ウェイスト（ごみを出さない）宣言（2003年）を行った自治体である。同町では「命令で登ると重く感じるが、自発的に登ると軽く感じる」という理念のもと、「1Q（1 Question）運動会」を実施するなど、住民が主体的かつ前向きに地域課題へ参画できる仕組みづくりが行われている。また、「葉っぱビジネス」は、昭和56年の冷害を契機に新産業創出を模索する中で生まれた取組である。身近にある紅葉などの葉を商品化するという発想の転換により地域資源を活用した産業を確立し、現在では平均年齢70歳前後の高齢者が中心となって地域経済を支えている。長年にわたり「誰一人取り残さない」地域づくりを継続している点は、本校の実践を持続可能なものとする上で重要な示唆を与えるものであった。

さらに、徳島県立阿南支援学校を訪問した。同校では竹の伐採や紙漉き、竹パウダーを活用した防災トイレの開発、地元企業と連携した園芸活動などを展開している。これらの取組は、教育目標と生徒の実態を踏まえながら持続可能性を重視して再構築が進められている。授業見学においては、生徒が主体的に活動する姿が多く見られた。教職員との信頼関係に基づく安全・安心な学習環境が、生徒の主体性を支えていることが分かった。

4 研究実践の成果と課題



図 20 販売会で SDGs 商品を売る生徒の様子

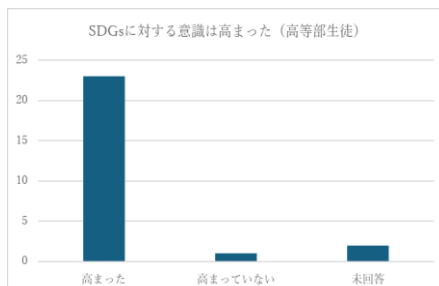


図 21 SDGs 意識調査（生徒向け）N=24

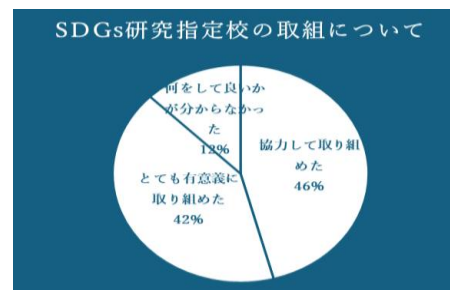


図 22 SDGs の取組意識調査（教職員向け）N=24

【成果】

- 1 学校全体で SDGs と教育活動の関連を意識する体制が整った。
- 2 図 21 に示される通り、生徒の主体的活動が促進され、継続意欲が見られた。
- 3 地域課題と学習活動を結び付けることで、地域理解が深化した。
- 4 生徒の自己効力感の向上が確認された。
- 5 学校ホームページ等を通して对外発信を行った。
- 6 SDGs QUEST みらい甲子園 2025 ファイナリストに選出（高等部）
- 7 第1回沖縄 SDGs アワード環境部門大賞（高等部）
- 8 令和7年度食品ロス削減アイデア募集キャンペーン 継続実施賞受賞（中学部）

【課題】

- 1 図 22 に示される通り、取組に対して「何をしても良いかが分からなかった」層への丁寧な働きかけが不足していた点は課題である。
- 2 教育目標との関連を明確化し、生徒の実態に応じた実践の精選を進める必要がある。

5 今後の展望

本研究により、本校では SDGs を軸とした教科横断的な教育実践の基盤が整いつつある。今回の報告は主に教科の実践を取り上げたが、その繋ぎ役として給食室や図書室が果たした役割は大きい。本校で最初に SDGs を取り上げ、掲示物等でその啓発を図ったのは給食室であるし、図書室では学習に必要な SDGs に関する書籍を揃え、教科と連携した取組を積極的に行った。今後は、引き続き各部署の繋げる力を最大限に活用しつつ、SDGs を教育課程全体の中に位置付け持続可能な実践へと発展させる必要がある。具体的には以下の取組を行いたい。

第一に、学部間の連続性を意識した指導体制の構築を図る。小学部においては身近な生活体験を通して「気づき」や「関心」を育て、中学部では地域や社会との関わりを広げながら「考える力」を伸ばし、高等部では課題解決に主体的に参画する「実践力」へと発展させる。このように、発達段階に応じた学びを積み重ねることで、SDGs 学習を系統的に位置付けていく。

第二に、地域との連携の深化である。本校が目指す「開かれた教育課程」の実現と SDGs 達成を目指す教育実践は高い親和性を有している。これを踏まえ、学校内にとどまらず、地域資源を活用した探究的学習を推進するとともに、行政・企業・関係機関との連携を強化し、学習成果を地域へ還元する循環型の取組へと発展させる。

第三に、生徒の主体性と自己効力感を一層高める指導の在り方を検討する。視察で得た知見を踏まえ、生徒が自ら問いを立て、企画し、振り返るプロセスを重視する。安全・安心な学習環境の中で主体的な挑戦を支える指導体制を整えていきたい。

第四に、実践の評価と改善を継続的に行う。教育目標との整合性を確認し、生徒の実態に応じて活動内容を精選することで、無理のない持続可能な取組へと発展させる。

本校は SDGs を単なる目標として掲げるのではなく、「自分たちの暮らす地域をより良くするための行動指針」として位置付けたい。そうすることで、今後も生徒が地域社会の一員として参画し、「私たちからはじまる住み続けられるまちづくり」を実践することができるであろう。

6 参考資料

- ・ 地方創生 SDGs・SDGs1 未来都市・自治体 SDGs モデル事業・地方創生推進事務局 (<https://www.chisou.go.jp/tiiki/kankyo/miraitoshi.html>)
- ・ 沖縄県食品ロス削減の取組アイデア募集キャンペーン (<https://www.pref.okinawa.lg.jp/kurashikankyo/shoku/1023571/1035939.html>)
- ・ 徳島県 (<https://www.pref.tokushima.lg.jp/sdgs>)
- ・ 上勝町 ゼロウェイスト宣言 (<https://www.tourism-kamikatsu.jp/pages/initiatives#lnk2>)